

2回 TAE を施行したところ著明な抗腫瘍効果が得られ、現在4カ月生存中。症例3は72歳、男性。抗癌剤動注（CDDP, MMC, ADR）により腫瘍が縮小し延命が得られ、11カ月生存した。血流が比較的豊富なためか TAE が有効であり、また動注有効例もみられるので、積極的治療で予後の改善が得られるものと思われた。

41) 転移性肝癌におけるリザーバーによる反復肝動注施行例の予後に関する検討  
—大腸癌肝転移例を中心に—

畑 耕治郎・五十嵐広隆  
五十嵐健太郎  
月岡 恵・何 汝朝（新潟市民病院）  
市井吉三郎（消化器科）  
山本 陸生・斉藤 英樹（同 第一外科）

大腸癌肝転移患者48例にリザーバーによる反復肝動注を施行し予後を検討した。肝転移巣に対する直接効果は奏効率33.3%で、50%生存期間は504日であった。多変量解析では転移巣の肝占拠率が有意な予後決定因子となり、300<ALP, 500<LDH 群では予後不良であった。治療継続期間は平均17.7月で、全経過中痛院治療が占める期間は平均75%であった。治療継続中の肝外病変の出現が52.4%、悪化が83.3%にみられた。本療法は痛院で長期治療継続が可能のため大腸癌肝転移に対して有用な治療であると考えられるが、肝外病変のコントロールを考慮した治療が今後の課題である。

42) DIC を合併し PTGB-D で救命しえた気腫性胆嚢炎の1例

菅原 聡・波田野 徹  
銅治 康之・佐藤 貞之  
佐藤 祐一・窪田 久  
富所 隆・戸枝 一明（厚生連長岡中央）  
杉山 一教（総合病院内科）

急性気腫性胆嚢炎は本邦では1958年に初めて報告され、胆嚢内腔及び胆嚢壁内にガス貯留を認める比較的稀な疾患である。これまでは早期手術が提唱されてきたが、近年経皮経肝胆嚢ドレナージ（PTGB-D）施行例が報告され、その有用性が認められている。今回我々は高齢でDIC・心房細動を合併し、早期にPTGB-Dを施行して良好な経過をとった気腫性胆嚢炎の1例を経験したので報告した。敗血症やDIC等の重篤な合併症を有し、重症化している場合が多く、緊急手術は危険性が高く、比較的侵襲の少ないPTGB-Dは胆嚢内の減圧、排液、

抗生剤局所注入を可能にすることからも良い適応であると考えられる。

43) 術前には切除不能かと思われた肝門部胆管癌の1切除例

佐藤 攻・清水 武昭  
宗岡 克樹（信楽園病院外科）  
柳沢 善計・村山 久夫  
山際 訓・曾我津也子（同 内科）

症例は72歳、男性。閉塞性黄疸で発症した肝門部胆管癌症例であり、PTCDを左右1本ずつ施行した。その後、後区域枝にもPTCDを施行したが、ドレナージされない左内側区域枝、尾状葉枝の胆汁鬱滞から胆管炎が頻回に発生。病変は左は内側区域枝分岐部におよび、右は前後分岐部を越えていると術前診断し、根治切除は困難かと思われた。しかし、胆管炎を頻回に起こすことから救命のため切除にふみきった。切除は拡大肝左葉切除術を施行。肝門部の胆管分岐形式は北回り2分岐型ではなく、南回り後枝総肝管流入型であり、根治切除が可能であった。肝門部の胆管分岐型を正確に診断することの重要性を痛感した症例を経験したので報告した。

44) 当院における胆道系 Expandable Metallic Stent (EMS) 使用例の検討

銅治 康之・波田野 徹  
菅原 聡・佐藤 祐一  
窪田 久・岸 裕  
富所 隆・戸枝 一明（厚生連長岡中央）  
杉山 一教（総合病院内科）

近年EMSの開発が進み、胆道閉塞に対し胆道系EMSが一般臨床で広く使用されはじめている。今回我々は平成5年1月から平成6年2月までに、7例の胆道閉塞症例に8回EMSを挿入したので報告する。EMSは全てCook社製GIANTRUCO-RÖSH Biliary Z-Stentを使用した。

7症例の平均年齢は73才、EMS挿入後の経過は13ヶ月から2ヶ月で平均7.7ヶ月、全例生存中である。再閉塞症例を2例認め、1例にEMSの再挿入を行った。7症例全てがPTC-D tubeを抜去出来、減黄効果も充分で、家庭復帰が可能であった。